



第1828回 例会

2011-12年度RI会長:カルヤン・パネルジー
 第2640地区ガバナー:大澤 徳平
 創立:昭和49年5月15日
 会長:上原俊宏
 幹事:佐田一三
 会報:榎本真弓



VOL. 38 No. 32

2012年 3月14日 (水)

事務所:田辺市下屋敷町81-10
 きのくに信用金庫田辺支店3F
 Tel 0739-24-6427 Fax 0739-34-5008
 E-mail t-eastro@mb.aikis.or.jp
 例会:毎週水曜日 12:30~

司会者 上原俊宏会長

唱歌

”どこかで春が” 谷中順次郎君



ゲスト 稲村の火の館 館長 熊野亨様

出席報告

会員数	義務免除	欠席者数	本日出席率
47名	3名	11名	75%
2月29日修正出席率 86.36%		2月の平均出席率 85.08%	

ヴィジター 田辺 R C 榎本長治様

ニコニコ箱

(敬称略)

- ◇お世話になります。 田辺 R C 榎本長治様
- ◇稲むらの火の館 館長 熊野様をお迎えして。
木村・小山・楠本・森本・中川・岡本
武田・谷中・上原・渡口・吉田・吉本
- ◇お久しぶりですね。
丸山博・丸山勇・坂本・山本・佐田
- ◇先週、娘の結婚式がすみました。 愛須
- ◇結婚記念日に綺麗なお花を届けて頂きありがと
うございました。 安井
- ◇業務多忙です。 堀
- ◇先日朝早くに、腰の曲がったおばあさんが棒の
先にタオルを巻きつけて道路のカーブミラーを
磨いていました。おばあさんには直接関係の無
い事をしている姿を見て感動しました。ありが
とうございます。感謝しています。 平野
- ◇結婚記念日 竹村・安井
- ◇本人誕生日 丸山勇・吉本

会長報告

- 本日のゲストは稲むらの火の館 館長 熊野 (くまの) 享 (とおる) 様です。後ほど宜しくお願い致します。
- 3月10日(土)本宮プロバスクラブ創立2周年大会に第35代会長 栗山侑三君が出席してくださいました。ご苦労様でした。
- 3月11日(日) P E T S が開催されました。会長エレクトの橋本隆君、ご苦労様でした。
- R財団より吉田和枝君にポール・ハリス・フェローの認証状とバッジのセットが届きました。
- 米山より堀龍雄君に第5回米山功労者の感謝状が届きました。
- 本日例会終了後、定例理事会を開催致します。理事・役員の方はお残り下さい。



幹事報告

- 例会日時変更
◎新宮 R C 3月14日(水) → 3月16日(金) 13:30~
場所:熊野川町田長
「熊野川」記念碑復興除幕式
- ◎白浜 R C 3月30日(金) → 3月26日(月) 18:00~
場所:ホテルグリーンヒル白浜
4月 6日(金) → 4月 8日(金) 10:00~
場所:国際障害者交流センター (地区大会)
- メイクアップ
・3月10日(土)本宮プロバスクラブ創立2周年記念大会 栗山侑三君
・3月11日(日) P E T S 会長エレクト研修セミナー 橋本隆君

会長報告の前に

先の日曜日白浜町河原谷と上富田町生馬の境界にある **卒塔婆トンネル**の旧道を歩いてきました。桜の芽はまだまだ堅かったのですが、鶯の初音を聞きました。山の木も少し黄緑色の若芽をのぞかせていました。間もなく春分の日がやってきます。鶯は過ぎ、「玄鳥至:げんちょういたる」の季節になるようです。つまり、間もなくツバメも飛来する季節になるようです。帰りに日置川で遅い土筆をとってきました。やがて山桜も咲くでしょう。そして熊野古道をあるく季節になります。歩けるうちに歩きましょう。

奉仕できるうちに奉仕活動をしましょう。

■回覧

- ・週報「粉河RC」
- ・「ハイライトよねやま144号」
- ・ガバナー事務所より「国際大会 地区ジャパンナイトのご案内(再)」
- ・3月16日(金)新宮RC例会 記念碑除幕式と瀨峡観光(出欠表)
- ・3月28日(水)移動例会のご案内(出欠表)
- ・4月11日(水)移動例会のご案内(出欠表)
- ・4月8日(日)お花見家族会のご案内(出欠表)

■連絡

- ・「識字率向上運動協賛のお願い」の募金箱をSAA・親睦の受付に置いています。ご協力宜しくお願い致します。
- ・新宮RCさんより台風災害の時に支援をして下さったクラブの会員の皆様にもご参加をお願いしたいと、「熊野川」除幕式と、その後、瀨峡観光をと、ご案内を頂きました。回覧しています。

委員会報告

■親睦委員会 山本亘君

4月8日花見会を開催します。ご家族の参加も大歓迎です。出欠表を回覧しています。



堀龍雄君

伊勢湾で我社の船が沈没しましたが、乗組員は皆無事でした。ご迷惑お騒がせしましたがどうにか落ち着きました。ありがとうございました。



本日のプログラム

～ 稲村の火の館 館長 熊野亨様 ～



皆さん、こんにちは。次の写真は現在の広村堤防です。向かって左側が海(船付き場)になります。広村堤防は土で固めた堤防ですが、平成5年に大規模改修があり、コンクリートで補強されました。

この堤防の素晴らしいところは、根底の長さが20mあり、高さが5mです。この角度が良いらしいです。河田先生に「乗り越えられることはあっても、崩され

ることはない」と言われました。機会があれば見学して下さい。

梧陵さんの凄いのは、むらの火の活躍の後なのです。

津波に襲われた町や村、昔も今も一緒、現在の**広村堤防**です。

強い引き波ですべて持って行かれます。家や財産を失います。次に襲うのは、飢餓です。食べ物が無い。そして、余震が続きます。いつまた津波が来るか、恐怖に襲われます。そして、復興への気力もなくなっていきます。

このとき梧陵は、「この広村は、ワシが助けなくて誰が助けるというのか」と復興に向けて、私財をなげうち村の復旧に立ち上がります。天災の恐ろしさをイヤと言うほど感じた梧陵はそれでも気丈に行動します。人々の気持ちを慰めたり、励まします。その一方で、その日食べるお米を調達します。お寺の備蓄米を使います。

しかし、これでは幾日も支給できないと考えた梧陵は隣村の庄屋に行き、蔵米50石を準備させます。

避難所というのは地上に畳を敷いただけの野宿です。これでは雨露はしのげまいと、直ぐに庄屋さんをお願いして、仮小屋建設の依頼をします。50軒建てます。

(今で言う仮設住宅) 色々と村の復旧に尽力しますが、村人は村を捨てて逃げようとするのです。「いつ津波が襲ってくるか、仕事もない、生活できない。」「これでは村はなくなってしまおう」「何とかして昔の広村を取り戻したい」どうすれば・梧陵は考えます。そして、・百年後に津波が襲ってきても大丈夫なように、大堤防を作ろうと決意するのです。

梧陵の行動は早く、11月に津波がきて、2月には工事が始まっているのです。ですからこの3ヶ月の間に堤防工事に関するすべての段取りを取り終わったと言うことです。まずは、親類筋に協力を求め説得します。どうやって説得したのかというと、この津波の恐ろしさに未だ震えている今こそ、村人が一体になり、心を込めて堤防を築く事が出来る。10年・20年がたって、無事な世の中に誰が堤防を築こうとするだろう。私の他に、誰か他にいると思うか。・・・と言って協力を求めるのです。時間がたてばこういうことは駄目だということですね。今やらないと成功しないと言うことをわかっているのですね。だから早く行動したのです。

1月に紀州藩に上申します。「紀州藩には迷惑はかけません。私のお金でやりますので、堤防づくりを許可して下さい。」・・・と上申します。

2月には村人に説明しています。「堤防つくるよ。働けるものはみんな来なさい。」・・・どうしてみんな



なのか？

実は堤防づくりには2つの目的がありました。

一つは、100年後に襲って来るであろう津波に対する、①津波防災

そしてもう一つは、津波で何もかも奪われた村人に仕事がないのです。そこに、堤防づくりという仕事があったのです。これは、②失業対策です。

この2つが一緒になって、堤防づくりが始まったと言うところに、ここに大きな意義と梧陵の功績があったのです。しかも、労賃の日払いをしています。堤防は3年と10ヶ月かかっています。1日に延べ500人が働きに来ます。そして、その日に日当を支給しているのです。労賃の日払いをするのです。これはワザとしているのです。なぜか？生活が苦しかったからです。これには生活が苦しいと言うこともありました。梧陵さんには、もう一つの深い理由がありました。それは、「働くことで報酬を得る」と言うことです。これは生きる力です。そして、生活の安定です。このことは、単なる経済的援助から来る、依存性、「援助に頼る」と言うことを避けようとしたのです。そして、村人自らの手で堤防を作り、将来の安定を勝ち取るぞと言う・・・自立なのです。自立した村人・・・このことを梧陵さんは目指したのです。だから大変深い意味合いがあったと言うことですね。

堤防づくりは毎日ではありません。少し融通を付けています。どういうことかと言いますと、お米づくりの忙しいときは、工事をストップして、米作りに精を出そう。そして、冬に暇になれば、みんなでまた堤防づくりをしよう。融通を付けたのです。だから村人は大変喜び、一家で堤防づくりに参加したのです。これによって、年間を通して、安定した収入が得られるようになり、被災後も村に留まり、苦しみの中から立ち上がることが出来たのです。梧陵の広村に対する思いや築堤にかける熱意が感じ取れます。ヤマサ醤油の当主であるという側面。自分ならできるという確信があったのではないかと思います。全てが梧陵の広村に対する「郷土愛」につながってきます。

しかし、堤防作りもはじめは順調にいきました。・・・ところが、今度は「ヤマサ」に大変なことが起こるのです。最初は工事が順調に進みました。しかし、安政2年10月2日、安政江戸地震が起こるのです。直下型の、マグネチュード6.9の地震です。これにより江戸の町は大火災、死者5千人以上。江戸にいたヤマサのお店は壊滅状態になり、ゆくゆくは閉鎖に追い込まれてしまうのです。

梧陵は翌年に江戸に帰ります。が、予想以上の被害でした。その時、番頭さんに言われます。

「これは、再開できるかどうかの問題ではなく、潰れるかどうかの問題ですので、どうか、広村に対する支援はやめてください。」・・・ときっぱりと言われます。それはそうでしょう、職人さんを路頭に迷わす訳にはいきません。代々続くお店も潰すわけにはいきま

せん。・・・かといって、・・・このまま広村に対する支援を打ち切ったら、広村はきっとダメになってしまうだろう。・・・梧陵は悩みます。・・・すぐには決断はつきませんでした。そんな時に、村から一通の便りが届き、それを見た梧陵が、「ああ、今でも私を信じて待っている村人がいるんだ。」

そこで、梧陵は、最後の決断をするのです。

「何としてでも堤防は完成さすぞ！」という、堅い決断をするのです。梧陵の決意が堅いと知って、その後ろ盾になってくれたのが、実は、職人さんであったのです。職人さんたちの多くは、この広村出身のひとたちだったので、「ふるさと広村のために」身を粉にして働いてくれました。そのお陰で、安政4年の醤油生産高が創業以来最高の生産高を記録し、ヤマサの経営も立ち直ってきたのです。

今回の大震災、国や県がしなければいけないことがたくさんあったと思います。150年の昔に梧陵さんが堤防築堤を通して災害復興活動をしていた。・・・と言うことです。これにより、

＊生活の安定と

＊生きる勇気と気力が生まれてきました。

また、この堤防作りを通して、地域のコミュニケーションができ、そして、村人同士が災害復興に向けて、ともに助け合うという共助の精神が芽生えて来たのです。

これは、梧陵が堤防建設のために投じた費用です。堤防で、約銀94貫344匁・・・1572両、約5億円 その他、いろいろと拠出しています。合計：銀372貫244匁・6200両余り、約20億円とされています。

【梧陵生い立ち】

梧陵さんはどうして広村復興に尽力したのか？それは、生い立ちを探る必要があります。

1820年ヤマサ醤油の分家に生まれます。父親は梧陵さん2歳の時になくなり、母親（しん）の手で育てられます。人生の節目節目で名前が変わる。・・・七太・儀太・儀太郎・儀兵衛・梧陵。七太にとって12歳の時、転機が訪れます。・実の母のことを「おばさん」と呼ぶ関係になる。たとえ主人になる人であっても、遊び暮らすのはもってのほか、使用人と同じ仕事、同じ生活、醤油造りの修業に入ります。12歳というのは、今の子で言うと11歳、小5年生です。母を思う気持ち、ふるさを思う気持ち、「郷土愛」は大変強かったと思います。・・・銚子の家には、実のおじいさんがいました。教養・・・村人からも尊敬・人格者。梧陵の清く優れた人格は、かんぼの影響を受け、育ったからと思われま。

少年期は文武両道に励みます。幼少の頃から読み書きそろばんから、論語まで暗唱し、気遣いのできる大変利発な子であったと言います。この頃の学問は漢学や儒教の精神「儒学」を熱心に学んでいます。

こういった儒学の思想が小さい頃からの学習で根付

いていたのではないかと思います。

梧陵さんのよく使う言葉に「**経世済民**」→

私はこの「経世済民」の志が梧陵の人生の根幹を占めていたのではないかと思います。だからこそ、広村の惨状を目の当たりにしたとき、広村復興に立ち上がったのも極、必然の流れであったのではないかと思います。

皆さん、「**釜石の奇跡**」って知っていますか？

釜石市は1200億円かけた世界一の大防波堤がありました。しかし、想定外の津波によって、無惨にも破壊されてしまいました。このことから私たちはどんなにハード面で守ったとしても想定外が来ればダメだと言うことを教訓として学びました。

「釜石市には小・中学生が3000人弱おりました。そのうち何と、99.8%が津波から助かったのです。それはどうしてかということ、日頃から防災教育や避難訓練を積み重ねていた。それが役に立ったのだと言います。ある地区では、いったん避難したのですが、ところがまだ危ないと感じたので、さらに上の方に避難したそうです。その時、活躍したのが中学生で、小学生の手を引き、高台へと避難したそうです。その避難する姿を見た一般住民も避難を始めたと言うことです。」・・・だから99.8%と言う数字が生まれてくるのです。これにより、いつしか「釜石の奇跡」と呼ばれ、新聞にも紹介されるようになりました。私たちはここから学ばなければいけないと思います。ハード面だけに頼ることなく、防災教育や避難訓練と言ったソフト面、ハードとソフトを一緒に充実させておくと言うことが重要だと言うことです。そして、私たち一人一人が防災意識を高めることが大切だと言うことです。・・・

今は温暖化の時代に入っています。ゲリラ豪雨や昨年紀伊半島を襲った台風12号のようなものすごい雨は、ひょっとしたら、毎年起こるかも知れません。日本のどこで起こってもおかしくない、もうそんな時代に入ったのだと言うことを私たちは自覚し、それに備えなければならないと言うことだと思えます。・・・

1時間に100ミリを越す猛烈な雨が降ったら、すぐに側溝から水が上がり、あっという間に床上浸水になり、それが洪水となって氾濫するのです。

「津波と洪水は逃げるしかない」私たちはそれに備え、防災意識を高めましょうということなのです。

昨年の言葉に「**絆**」が選ばれました。

つかんでいた手を放したために亡くなった人がいます。それを今も悔やんでいる人がいます。仮設住宅で孤独と戦っている人がいます。バラバラになってしまったコミュニティ。絆というのは人と人をつなぐ生きる力です。殺伐とした都会にあっても、夫婦の中にあってもこれからの世の中は絆を大切にしていけることが、日本を再生することにつながっていくと思います。

先日小学生から質問されました。

梧陵さんを言葉で表すと、どんな人ですか？

私は色々と浮かびました。

「経世済民」「仁」「郷土愛」「人材育成」「済世安民」全てが当てはまるのです。でも私はやはり、「経世済民」世のため人のため、にしました。

これはまさに、ロータリーの皆様方の活動そのものが「経世済民」であろうと思います。私も、梧陵語り部として、広川町のために尽くしたいと思っています。

有り難うございました。

【 浜口梧陵 年譜 】

- 文政3年 1820年
紀伊国有田郡広村に生れる
- 天保2年 本家の養
嗣子となり、初めて江戸を
経て銚子に赴く
- 嘉永3年
初めて佐久間象山の門に出入
りする
- 嘉永6年 儀兵衛と改名して
家督を相続する
- 安政元年 広村に津波が襲来して被害甚大なり。
梧陵全力をあげてこの救済にあたる
- 明治元年 藩政改革に際し、抜擢されて勘定奉行
となる
- 明治4年 駅通頭(現在の郵政大臣に相当)に任ぜ
られる。和歌山県知事に任ぜられる
- 明治13年 県会開設と共に最初の和歌山県会議長
に当選する
- 明治17年 横浜を出帆し渡米の途に上る
- 明治18年 米国ニューヨークにおいて客死



稲村の火の館地図

